

P4C japan 1 月(2017)ミーティング記録

日時 1月21日(2017) 土曜日 17:30～

場所：大阪大学中之島キャンパス 605

参加者：大学教員 1 大学附属中等教育（高校） 2 支援学校教員 1 小学校教員 5 大学生 1

教育行政職 1 教育支援 NPO/カフェフィロ事務局 1 その他教員 1

計 13 名

記録：辻村

0.自己紹介

に続き、教育支援 NPO の方から教育支援の現場で P4C をすることの可能性について質問があり、運営スタッフから種々の示唆的なお話しがありました。

特に、生活が苦しい児童/生徒向けの P4C については、考察/実践する意義/意味があるという雰囲気は共有できていたようです。

1. 西宮市立小学校 図工展での取り組み「ココロの色・形」(11 月 2016 年)について

図工展の取り組みをまとめたレジュメと作品/コメントの資料をもとに担当された教員が発表。

〇レジュメ

小学校 第六学年「図画工作科」 単元指導計画

西宮市立〇〇小学校
図工専科 〇〇〇〇

1 単元名 「絵画表現をする」

2 題材名 「ココロの色・形」

3 単元の指導目標

(1) 自分の表現したい心のイメージを吟味し、用具や素材の特徴を生かして絵に表すことができるようになる。

(2) 友だちと作品について話し合い、作者の気持ちに共感したり多様な見方をすることができるようになる。

4 指導観

この単元は6年間の絵画表現学習の集大成として設定した題材である。目には見えないそれぞれがまったく違うイメージを持っているであろう「心」を表現するために、絵の具をはじめとした「色」や「形」、これまでに触ってきたさまざまな「素材」などに注目しながら自分の表したいイメージを探っていく。また、今回の単元では制作の途中でコミュニティボールを使った対話型の観賞を取り入れる。「色」や「形」、「素材」等ひとつひとつが自分の内的な心を表現するための刺激であるように、友達の考えている事や友達の作品を見ることによって生まれた新たな思考も表現活動において大きな材料になっているはずである。6年生という多感な時期を踏まえて日々の中で考えている事・言葉だけでは伝えきれない思い等を対話の力を借りながら一人ひとりが精いっぱい表す事ができるように取り組んでいきたい。

5 単元の指導計画と評価計画（全6時間扱い）

次	時	学習活動・学習内容	学習活動に即した具体的な評価基準(評価方法)
1	135分	○『目には見えない心の中の気持ちや変化を表してみよう』という課題に取り組む。絵の具や様々な素材をつかって自分が表したいと思った事を見つけていく。	○色や形に触れながら心について想像し、積極的に造形活動に取り組もうとしている。
2	45分	○コミュニティボールを使い、あらかじめ選んでいた3人の作品についてクラスで語り合う。語っていく中で、自分では思いつかなかった感情への接し方や、表現方法を見つけ、それを全体に伝えていく。	○友だちと作品について話し合い、作者の気持ちに共感したり多様な見方をすることができるようになる。
3	90分	○前回の話し合いを踏まえて、変化した気持ちや新たに表現したいテーマを考えながら、用具や素材を使って絵画を完成させていく。	○これまでの体験や自分の表現したいイメージを吟味しながら、用具や素材の特徴を生かして絵に表すことができるようになる。

○ 実践を終えて

今回は一人ひとりが全く違う「心」を目に見える形で表す事に挑戦したが、「心」を探っていく手立てとしてコミュニティボールを使った対話は非常に有効であったと感じる。コミュニティボールの助けを借りながら子どもたちが日々の中で考えていることや感じている事を吐露し、そういった体験も自分たちが絵を描いていく理由になっていった。そして絵を描くこと・自分の絵を見てもらう事・友達の絵を見る事全てを通して己の視野を広げ多様な個性を認め合うきっかけになった事を子どもたちと教師自身も改めて実感できた。

2.対話

発表を受け参加者で対話（トピックごとに整理してまとめております。）

・1次の135分について

3時間を自由に使えることは大変であったのではないかな？

→創作に時間を使える児童もいたがそれができていない児童もいた。

心という見えないものを見て抽象画（造形？）作品に表現することでの葛藤（の時間）

・2次の45分（対話）について

対話の方法—3枚の絵を床において生徒と教師がその絵を囲み対話する。

制作と制作の間に対話を入れたかった。対話することで一人一人が別の存在であること、〈個〉を際立たせることができるかと思った。

「図工」の時間ということのを忘れて対話する児童（真剣に対話することでケンカになりそうになった）もいた。

↓

技法を真似る児童もいたのでは？

・3次の90分（対話後の制作の時間）

「6年生という多感な時期」—中学受験前（志望決定）／小学校最後の行事を終えた後
第2次性徴 心・身・環境が変化しようとする時期に「心」をテーマとした抽象画（造形？）作品の創作に与えた影響。

最初はスタイリッシュに描いていた（描こうとしていた）ものが変化

教師の望む作品を創作していた児童の作品の変化（優等生の変化）＝対話後心の実際を表現しようとする。

→大学のアメリカ分校での経験：優等生といわれる学生ほど「しんどくなる」傾向が強かった。（帰国する学生が多かった）そのように評価されている学生ほど注意深く対応した。

→心の「もやもや」に名前をつける（表現として可視化する）⇔開示すること

→対話後円形に表現し直した作品の円は p4c のメタファーであろう。

・図工展鑑賞者の反応

暗いイメージの絵がある。

3年生の保護者；6年生でこのような絵画（抽象画？）が画けるようになるのか。（称賛？）

概ね高評価であった。

→スキルも含め素晴らしい絵がある。（発表者が持参した作品の画像を見た参加者）

・他

素晴らしい実践である。

対話前の作品：対話後の作品：コメントを見たい。

今回の実践について「応用哲学会第九回年次研究大会：福山大学 22 23.4.017」ワークショップに応募。

以上